幼児とお伽話の結びつきは どうなっているか

室谷幸吉

お伽話は、人生の出発点にある幼い子らに与えられた、まことに恰好な人生の教科書にたとえることができる。だが、お伽話の多くが具えている基本的な骨組み――つまり勧善懲悪的に過ぎる見えすいた構成が、現代の社会には適合しようのない偏った生活理念であるとさげすまれ、顧みられないことが多いようである。しかし、だからといって、こんにち、一顧にも値しない無価値なもの・ムダ物として捨て去ることは、余りにもそそっかしすぎよう。

お伽話には、文明社会のこんにちにも、なお脈々と「人生の真と美」を説き明かしてくれる貴重な宝が数多く蔵されているのであって、その貴重な宝を見逃すというはなしはない。また伝承されてきたお話のスジ立てはそのままでも、現代に不適合な部分や細部については、現代にふさわしい〝考え方〟によって、お話の色どりを変え、味わいをつけ加えることも可能なわけだ。事実このようなお伽話の時代適応的加工は、いつの代にも、善意の良民たちの手によって休みなくつづけられてきた。

お伽話（童話をふくめて）は、子どもの知恵を、徐々に開拓していくのに、容易で、賢明で、子どもらに喜ばれる最善最良の方法なのである。子どもらにいいお話を、たくさん用意してやる仕事を、子どもらの健全な成育を願うオトナ達・親達の、光栄にみちた行動の一つに数えておいていいではないか。

戦時中、山梨かの田舎に疎開した画家の某氏が、近所の子どもらにせがまれるままに日に一つ、三日に一つと話していったお話が二百にもなった。種切れになって閉口したという奇篤な話もある。

ところで、こんにちの子どもたちは、そのように望ましいお伽話と、日常生活の中でどのような結びつきをもっているであろうか。

「浦島太郎のおとぎ話を知らないものはあるまい」（某新聞）……だがちょっと待ってほしい「浦島太郎」のおとぎ話を知らないものだって、ないとはいえそうもないのだから、入学前の学令児についてたずねてみたら、一〇％余りの子どもが「浦島さんの話ってなあに？」と知らないことを表明している。もちろん、誰だって、生ま

れたてから「浦島太郎」の話を知っていたわけではない。いつ・どこかで・誰からか、何からか、その話を知ったわけである。

ここで「お伽話」という呼称は、単なる「お話」や「童話」とはちょっとちがったいろどりをふくんでいる。それは、或る人間と他の人間との『かかわりあう或る親和的な営み』というふくらみを内に包んだコトバである。夜のつれづれをなぐさめ、一日の労働の疲れをいやす、たのしい「語りあい」「聞きあい」の材料を意味するコトバでもあった。

このささやかな、しかし豊かでほほえましく、幸福感にあふれた仕事の担い手は、多くの場合、母親であり、祖母であった。（こういう傾向は、こんにち消滅に近いとは言え、十分うかがうに足る形を残してくれている。）子どもたちは、寝物語として、母親の口から、或いはまたおばあさんの口から、同じ一つのお伽話を、五つたびも十度びも、くり返し聞かされたのだ。受動的にばかりではなく、「ねえ、きょうもお話してちょうだい。」と、口うるさくせがみ、忙しい親達の夜なべ仕事の手を止めさせもした。お伽話をきくたのしみ故に、眠ることはいやなのだが、夜の来ることを心待ちにした子どももあったにちがいない。現に私は、そうして育ってきた。私に限らず、こういう幼い日の思い出をもつ人は数多いはずだ。

お伽話は、民族が生み育ててきた貴重な文化遺産である。この貴重な遺産の相続を、子どもらは、ごく最近までは、主として、家族の「口語り」を通して行なってきた。そこでは単に、遺産としての〝物語〟が受け渡されるだけでなく『語り――聞く』というコトバをなかだちとする直接的な人間のふれ合いを通して、話の〝すじ立て〟以下に、ゆたかで温い人間の愛情が交流し合った。

絵本を見る・本を読む――なるほど、こういうやり方でさまざまな話にふれることができる。話にふれる、という点だけからみれば、これも能率的な方法にはちがいない。しかしこのような読書式接触では、語り手を通して、耳から話を流しこみ、語り手のコトバに伴う表情の変化や、微妙なゼスチュアなどに直接にふれるというわけにはいかない。

私の小学生時代、それは町の学校であったが、時おり地方回りの〝お話の先生〟がやってきた。この巡回講話者が訪れると〝お話が聞かれる〟といって手をうって喜んだ。私たちは、雨天体操場のかたい冷たい床板にヒザ小僧をそろえて坐りこみ、三十分なり一時間なり、声色入り、ゼスチュアたっぷりの、その先生の『持ち込み話』に聞きほれたものだ。年に一度か二度回ってくるそういう機会を〝幸運のチャンス〟として私たちはどんなに待っていたことか。ある日のステージで〝お話を売りに来た〟ある先生の語った話の中味はおぼろになってしまっても、その先生の手を前につき出した身ぶりや、天井に目を向けた表情などが、妙に頭のシンにこびりついていて忘れられない、それはまったくふしぎに強烈な印象となって残っている。

つまり、お伽話の〝語り部役〟は、家庭の母以外に、別にもうひとりいたのだ。話の伝え手は、母親たちだけではなかった。学校回りの〝話を売る〟行商教師が、子どもの心に刻みつけていく印象の強さ、あわせてその楽しさには「少年倶楽部」や「少年世界」や「譚海」や「武侠少年」などという、月々の雑誌の、その中に印刷され

た物語をよむ場合のそれとは、比較にならぬものがあった。それこそ、人間が人間に接して影響をうける、あの底深いひびき合いによるものと考えないわけにはいかない。

こんにちの子どもらが、民族の文化遺産である数々の「お話」にふれる、その仕方は、印刷本を通して・テレビを通して・ラジオを通して・或いは映画や紙芝居や歌や幻灯を通して、という形にかわってきている。映像を通しての伝達は、なるほど前述の口誦的方法とはちがった、新鮮な迫力と現実感とをもっていよう。だが、それはそうであっても、こんにちの子どもたちが、親たちの口から寐物語に伝えられるという相続方式を失ったことは、進歩と考えていいか、或いは退歩とみるべきか。私は単純に、そして一方的にこうだと割り切って片づけられないものを、そこに感ずる。

テンポの早い近代の生活様式が、子どもとその親たちの寐物語などという、まだるこしいお伽的世界の存続をゆるさなくなったのか。或いはまた、親たちの多くが、怠惰で、面倒くさがって、そういう営みを忌避しだしたのか。おそらくそのどちらもが、何割かずつ原因としてまじり合っているものと思う。

マスコミの発達進歩は、一方では、今までだれ人も予想し得なかった新しく強い価値を創造しているのであるが、それと同時に他方では、今まであった貴重な尊い価値をおしつぶし殺してもいるのだ。何がプラスされ、それと引き合いに何がマイナスになったのか、私たちは、冷静に、聡明に、観察検討調査を怠ってはならない。

昭和三十五年三月、私は、主として東京山の手の三十余か所の幼稚園に籍をおく約六十名の学令児について「子どもらが、生後六年を経過する間に、お伽話にどのように接してきたか。」を調べた。「桃太郎・かちかち山・舌切雀・花咲爺・さるかに合戦」など、いわゆる日本の五大童話をはじめ、「こぶとり・一寸法師・浦島太郎」或いはまた「シンデレラ姫・七匹のこやぎ・ピノキオ・白雪姫」など和洋とりまぜて十九のお話について、

・子どもが、そのお話を知っているか、どうか。

・知っているとすると、どんな方法で知ったのか。

を、個々の幼児について、主に母親の手を通して調べてもらった。その結果、いろいろ興味ある現象や傾向を発見し、同時に、注意を要するいくつかの事実をよみとることができた。

こんにちの子どもらが「お話」にふれ、「お話」を知り、「お話」を心の栄養素として摂り入れるには、どんな方法を使っているか。それには次ぎの十方法があり、それ以外にはないことがわかった。

・本・紙芝居・うた・劇・テレビ・映画・幻灯・レコード・

こどもはお伽話をどのくらい

知っているか

話＼事項	知っている子の数	知らない子の数	親和接触指数
ももたろう	100 %	— %	131.1
かちかち山	89.7	10.3	93.1
したきりすずめ	93.1	6.9	96.5
花さかじじい	82.8	17.2	93.1
さるかに合戦	86.2	13.8	86.2
ねずみのよめいり	44.9	55.1	44.9
こぶとり	86.2	13.8	96.5
一寸法師	93.1	6.9	96.5
かぐやひめ	82.8	17.2	86.2
浦島太郎	89.7	10.3	93.1
さるじぞう	20.7	79.3	20.7
文福茶がま	82.8	17.2	82.8
うさぎとかめ	96.5	3.5	100.0
赤ずきん	93.1	6.9	103.5
マッチ売りの少女	58.6	41.4	65.5
シンデレラ姫	82.8	17.2	96.5
七匹のこやぎ	89.7	10.3	100.0
白雪姫	82.8	17.2	103.5
ピノキオ	86.2	13.8	106.9
一話平均	81.1	18.9	89.3

カルタ・絵話――の十種である。

そしてこの場合、『本』を通してお話にふれるというのが圧倒的に多い。大体八割が「本」を手にして、というものである。この場合、一口に『本』といっても、その中には、絵を主体にした絵本と、文を主体とした物語とがあるわけだが、それについてみると、十分な文字知識をもたぬ幼児の当然な状態として絵本によるものが十中の九――というよりは、百中の九十七～八を占めていた。

次ぎに、お話では、語り手が誰であるか、に大いに関心がもたれるのであるが、語り手としてあげられたのはつぎの六者であった。

・幼稚園の保母先生・母親・父親・祖母・姉・友人

そして幼稚園の保母先生が語り手として第一人者になっている。母親に比べて約二倍半の六三％という数字が出ている。また祖父や兄といった人達が、語り手としてひとりも登場していないのは印象的なことである。

幼稚園の保母先生が、語り手の第一人者とはいってみても保母先生が園児たちに語って聞かせるという営みは、この調査にあらわれた限りでは、決して驚くほどに多いものではない。これはちょっと予想に反した姿であった。いや、実は、調査前に予想というほどの予想をもっていたわけではさらさらなく、むしろ調べてみて、意外な少なさ・低調さに驚いている、といった方が正直なのだ。

前述した通り「お話」の価値というものは、単にその話の筋立てや事件の運び方だけにあるのではなく、かえって伝達者の心情・態度やフンイキに、より大きな、思いもうけぬ人間的価値や効果があるという論法にしたがい、もっともっと子どもらに『語り』形式によるお話の伝達の機会を、数多く用意してほしいと願うわけである。このことは、幼稚園や保育園の保母先生だけにではなく、母親一般、父親一般、または祖父祖母・兄姉をもふくめて、家族全体の人に向かっての共通な期待なのである。

愛する子どもらの健全な成長を親たちが願うならば――また、それを願わぬ親というものはまずまずいないと思うのだが――「仕事が忙しくて」とか「話すのがオックウで」とか無精をきめこんではならない大事な配慮が、ここにあることを指摘しておく。

テレビによって「お話」を知ったという子は年を追って増加の傾向にある。『本』に次ぐ第二位の媒体であって六・九％となっている。これはまったく最近の特徴的な現象であって、数年前には見られなかったものだ。テレビを通して、という映像伝達は、手法としても興味深く、その印象度も、他の媒体よりは強く、浸透度・理解度も深いようである。こんにち以後の遺産伝達の方法としては、読書式方式と並存の形で、いや時としてはそれをもしのぐ中心的な役割を荷うものと考えられるのであるが、この場合、子どもらが、テレビ客人としてただ一方的に受容するだけでなく、母親と同座し、話し合いを交えつつ視聴するとか、視聴後に気づいたことを話し合うとか、とにかくいろいろと工夫を加えて、直接的な人間接触の形態をないまぜることが必要と思われる。

明子は毎日平均二時間はテレビを見ていて、「こぶとり」「かぐやひめ」「マッチ売りの少女」「ピノキオ」のお話はテレビを通して知った。治も毎日平均二時間の視聴組であって、テレビを介して知ったお話は「さるじぞう」「赤ずきん」「マッチ売りの少女」である。

テレビでお話にふれたという子は、たいてい、毎日欠かさずテレビを視聴しているという、いわゆる〝テレビっ子〟である。テレビ受像機の普及と放送番組の充実とに伴って、この子達のような、テレビを通しての〝お伽話相続児〟がふえるであろうことは想像にかたくない。

そこで、昔話・童話などが、劇の形で、人形劇の形で、または音楽劇・舞踊劇の形などで、もっともっとひんぱんに、テレビの番組にとりあげられるようになってほしいと思う。

〝童心のふるさと〟を尊ぶ、という意味においても、こんにち、昔ばなしの類が、もっと温い目で見直されねばなるまい。

アキ子は「桃太郎」は絵本で、「うさぎとかめ」は幼稚園で知り、「舌切雀」は、ほんの少し知っているのだが、その他の十六話にはふれたことがないという。

一般の子どもたちにくらべて、これはあまりにも貧弱な説話接触である。「お話をしらない。」ということは、直ちに、だから生活能力が低いのだ、ということにはなるまい。しかし、その子の精神生活のうるおいや豊かさとは深い結びつきがあるようだ。また、その子の物の見方や考え方に、かなり影響をおよぼすであろうことは想像にかたくない。ではなぜアキ子のような子が出てきたのであろうか。

アキ子はK保育園の三年保育児である。保母さんが園児たちを集めて、紙芝居を見せている時でもそれに興味を感ぜずひとり座を離れて、となりの部屋に行ったり、園庭にとび出したり、気ずい気ままに動いていた。おちついて紙芝居をみたり、お話を聞いたりできないタチの子だった。家庭でもまったく同じ様子で、母親が絵本をみせようとしても食いついては来ず、お話を読んで聞かせようとしても、聞くどころか逃げ出してしまう。お手伝いさん・おばあちゃんに四六時中かしづかれ、それこそ、過保護の状態で育てられてきた子どもである。こうして甘えん坊で気まま、気むずかしいわがまま一点張りの子ができてしまったのだ。体の方は、とびぬけて丈夫だが、頭の方はたいへん弱く、たよりなく、普通の同年令児にくらべて知恵の遅れが目だった。アキ子の頭に昔ばなしの蓄積がなされていないのには、およそ上のようなアブノーマルな生活が背景にあった。

〝昔ばなし〟の伝達機関という意味においても、幼稚園の存在は大きな意味をもって来つつある。幼児の大半が幼稚園か保育園のいずれかに所属し「小さな勤め人」として毎日通園する現代では、保母さん方が家庭の母親に代る重要な地位にとってかわりつつあるわけで、保母先生にかけられる期待と、同時にそれに伴う責任の大きさ・微妙さを、改めて見直したいものである。家庭の母親たちは、こんにち、幼児の精神形成者・お伽話の中心的な伝達者であったその地位を、急ピッチで失いつつある。母親たちの、こういう地位の崩壊が進めば進むほど、それにとって代わるもの、生じた欠陥の埋め手として、保母先生方の地位は逆に高められてくる。

そこで、こんにちの段階においては、一方では、家庭におけるおかあさん方の地位の崩壊を極力防ぐ、とともに他方では、保母先生の影響力を一そう高め深めていく組織的な方策を講ずることが、急務であると考えられる。

人工衛星のめぐる地球に今宵また童話を聞かす小さき灯

大井　洋子